

草創期メソヂスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観

— 『ファウンダリー・コレクションFoundry Collection』 より —

The Art's Values of the first Methodist Hymns for John Wesley

— From the “Foundry Collection” —

次世代教育学部こども発達学科

山本 美紀

YAMAMOTO, Miki

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：音楽, 芸術, チューン, ジョン・ウェスレー, メソヂスト

Abstract： The founder of the Methodist movement, John Wesley, published his first hymnal “A Collection of Tunes Set to Music as They are Commonly Sung at the Foundry” (Foundry Collection) for people who attended his church. However, the hymnal was criticized as the second edition was never published, in addition to the use of atypical music notation for the tunes. This research paper aims to assess the accuracy of such comments and discusses the artistic value of the Collection in addition to the faith of the Methodist movement that was established during this time.

Keywords： Music, Art, Tune, John Wesley, Methodist

I. はじめに

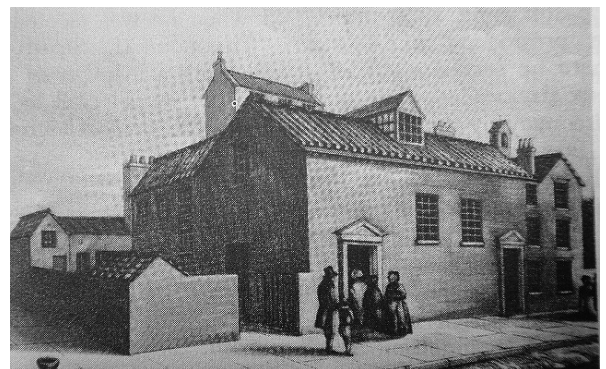
『ファウンダリー・コレクション』“A Collection of Tunes set to Music as they are commonly sung at the Foundry”.とは、メソヂストの創始者であるジョン・ウェスレー（John Wesley 1703-1791）が、その草創期に自分のもとに集まる人々のために作った讃美歌集である。メソヂストは、英国国教会の改革運動を起源とするプロテスタントの一派であり、日本では青山学院大学や関西学院大学がその教派に由来する。また、ジュースメーカーのウェルチの創業は、メソヂスト教会が聖餐式に使うノン・アルコールの葡萄酒を必要としたのがきっかけであるし、私たちに最も身近な讃美歌の1つである「アメージング・グレイス」は、メソヂストの信徒によるものである。

『ファウンダリー・コレクション』は、18世紀イギリスに端を発し、その後世界的な展開を遂げたメソヂストの草創期に作られた最初の讃美歌集である。ウェスレーはメソヂスト拡大にあたって、讃美歌に特別の機能をもたせ用いてきた。

本論考では、ようやく体を為してきたメソヂスト

の信仰を、ジョン・ウェスレーはどのようなものとして『ファウンダリー・コレクション』の中で表現してきたのか、コレクションの中に体现されたその信仰と芸術観を、一次史料である当時の『ファウンダリー・コレクション』の楽譜を手掛かりに考察しようとするものである。

I.1. ファウンダリーFoundryという場所（1739年～）

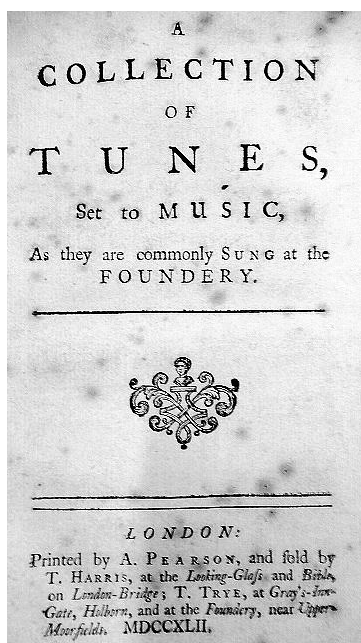


〈資料1 1839年ごろのファウンダリー〉

「アルダスゲートの回心」¹（1738年5月）と呼ばれる信仰の覚醒体験の後すぐに、ウェスレーは何らかの爆発事故によってモールゲートMoorgateに打ち捨てられていた公共の建物（製鉄所 iron foundry）を支援者に助けられて購入する（1739年）。これを修理して教会にしたのが、ファウンダリーFounderyである。そこは、ロンドンの北東角のフィンズバリー・スクエアFinsbury Squareにあり、現在もその名前と呼ばれている場所である。

ファウンダリーは、1778年までメソヂストと呼ばれる人々の本部として使用され、ウェスレー自身の言葉によると「膨大で粗雑な残骸の山」から多くの実りを得た場所であった。そこは1,500人が集まる礼拝所、300人の集まる小会議所、図書室（Book Room）を保有し、ウェスレーや他の説教者の住居ともなっていた。ウェスレー兄弟の母親が亡くなったのもここである。さらにそこはロンドンで修道院が崩壊して以来の、初の無料保健所としての活動を担い、無料の学校（2人の先生と16人の子どもからなった）や、寡婦のシェルターともなっていた。「ボランティア」という言葉は、本来軍隊用語（自ら志願して働く兵）であるが、今日的意味合いを持った活動が行われるようになったのは、このメソヂストの活動からであるといわれている（重富2004, 22-23）²。

I.2. 『ファウンダリー・コレクション』概要



〈写真1. 『ファウンダリーコレクション』表紙（メソヂスト・コレクション蔵：マンチェスター）〉

ウェスレーの下に定期的な集会がもたれるようになったのは、すでに1736年チャールズ・タウンでのことであり、当時は会衆派系Congregationの讃美歌集を使用していた。この讃美歌集は、その後のジョージア宣教（1735-1738）に持参されたと考えられる。ちなみにこの讃美歌集は、第2版が1738年に、第3版が1742年に出版されており、当時比較的短いスパンで1つの教派の讃美歌集が出されていたことがわかる。

冒頭にも書いているように、『ファウンダリー・コレクション』は通称であり、正式名称は“Collection of Tunes set to Music as they are commonly sung at the Foundery”で、「ファウンダリーで常に集まる人々の、楽譜付きチューン集」というものである。コレクションはジョン・ウェスレーが編集したことは間違いないとされているものの、彼自身の名前がどこにも載っていない。

実はチューンTuneという言葉は、日本語では非常に表しにくいものである。チューンは単純に訳してしまえば、歌詞に付けられる「旋律」であり、1つ1つに名前がついている。18世紀の教会では、このチューンに様々な歌詞が付けられて、「今日は、“AZMON”でこの歌詞を歌う」といった指示のもと、皆が歌っていた。そのため、チューンは覚えやすい単純なものが多い。また、その名前はチューンの出自に由来したり、聖書の意味が付けられていたりする。そのため、「チューンとはどういうものか」という理解は様々で、旋律そのものに意味がある、という人もいれば、ないという人もいる。

I.3. 『ファウンダリー・コレクション』の源泉

『ファウンダリー・コレクション』には、3つの源泉があるといわれている。1つはドイツコラール、2つめは詩編によるアンセム、3つ目はその他である。計42種類のチューンがあり、それぞれに歌詞がついている。

そのうち、ドイツコラールからは13曲が確認されており、おそらくジョン・フレイリッヒハウゼンJohn Freylinghausenの1704年の歌集より³引用されていると思われる（Westbrook 1974）。また、アンセムからはOld 81st (Cripplegate Tune p. 23), Old 112th (or VATER UNSER p. 40), Old 113th (p. 35) の3曲が採用されており、その他は、当時のオペラや歌謡曲からのもので、例えばヘンデルのオペラ「リチャードI世」よりジェリコ・チューンJERICO TUNEがあげら

れる。

後でみるように、『ファウンダリー・コレクション』には、現在も歌われているチューンが数多くあるが、メロディーだけで、伴奏は載っていない。

II. 先行研究に指摘される『ファウンダリー・コレクション』の問題点

現代までの多くの研究者が、『ファウンダリー・コレクション』について、その意義を認めながらも、ウェスレーにとってこの讃美歌集が誤謬が多いゆえの「試験的」な「失敗作」という、どちらかというとながてな評価を下している。その大きな理由としては、記譜法の間違いや、音域の不自然さ、何より第2版が出版されていなかったことがあげられている。

先行研究であるウェストブック Francis B. Westbrook もまた、同様の評価をいくつかの作品例を根拠に下している。それではここで、実際の楽譜に即して、上記の問題点を確認すると同時に、その問題点がどのような可能性を含んでいるのか考えてみたい。

II.1. 音域の問題の事例

Leipsick Tune. Vol. 2. Page 97.

Je—su! my Life, thy—self ap—ply,
Thy ho—ly Spi—rit breathe,
My vile Af—fec—ti—ons cru—ci—fy,
Conform me to thy Death.

Continued.

〈譜例1 ライプツィックLEIPSICK：『ファウンダリー・コレクション』No. 28上〉

Vol. 2. Page 26.

Je—sus, the all—a—ton—ing Lamb,
Sal—va—tion in whofe on—ly Name
Lo—ver of loft Man—kind,
A sin—ful World can find:
I ask thy Grace to make me clean,
I come to thee, my God: Open,
Continued.
O—pen, O Lord, for this Day's Sin
The Foun—tain of thy Blood.

〈譜例2. ライプツィックLEIPSICK：『ファウンダリー・コレクション』No. 38：〉

このライプツィック28番LEIPSICK No. 28は、ドイツコラルを由来とするチューンである。「ライプツィック」というのは、ドイツのライプティヒのことであり、このチューン名である。ここでは、シャープ#が1つのト長調で書かれているが、38番では同じチューンがニ長調に移調されて転載されている。一見して分かるように、上28番のト長調では上第2線の加線の3点ハ音までの音域が求められており、実際には発声不可能である。かといって、下の楽譜38番でもニ長調に5度下げられたものの、依然として最高音は2点ト音であり、一般の会衆には容易ではなかったと思われる。最後2行に歌詞がないのは、繰り返してうたう意図があったと考えられている。音域だけでなく、歌詞の音韻も通常のものに2行追加した868686であったことから、ウェストブックはNo. 28について、実際には歌われなかつたろうとしている。

しかし、それは歌集を「楽譜通りに歌う」前提で扱った場合である。ウェスレーがフルートをよく吹いていたということはよく知られているが、フルートの楽譜は、楽器の音域がト音記号の5線内に収まらないため、上方の加線によって示される音域が通常の音域である。つまり、ジョン・ウェスレーにとっては、この高さの音程の音が、一番とりやすい音であり、慣れ

親しんでいる音符の位置なのである。

II.2. 記譜法の問題



〈譜例3 ブロムシュヴィック・チューンBromswick Tune, 104th Psalm.〉

また、このブロムシュヴィック・チューンは、現代の楽譜の記譜法と比べて、2つの間違いが指摘される。1つは、ト音記号がかかれておらず、その代わりにト音（英語音名G）を表す場所に、大きく「G」の変形文字が書き込まれている。2つめとしては「4分の3」と書かれるはずの拍子記号も、「3」と書いてあるだけである。

さらに下の〈譜例4〉ではフラット**b**が1つのへ長調のチューンであるが、フラットを半音上げる際に、現代のナチュラル**b**で対応している。現代の記譜法で行くと、**b**ロ音にシャープをつければ、嬰口音すなわち異名同音のハ音になってしまう。



〈譜例4 「詩編113篇のチューン」より〉

III. 果たして誤謬であるのか？ 記譜法の特異性から見る可能性

このような単純な事柄の違いから、先に挙げたような『ファウンダリー・コレクション』に対しての評価が生まれてくるのである。しかし考えてみれば、親の代からの牧師の家に生まれ、オックスフォードで学んだジョンとチャールズの2人は明らかにエリートであり、音楽的に造詣が深かった。チャールズが結婚した裕福な夫人との家庭ではサロンがあり、オルガンや他の楽器が備え付けられていて、頻繁にサロンの集まりが開かれていたと言われている。また、チャールズの息子チャールズ（長男）とサミュエル（次男）とは優秀なオルガニストでもあった。孫のサミュエル・ウェスレーは、19世紀英国国教会の歴代オルガニストの中でも歴史に残る存在だ。そのように身近に音楽的環境があった彼が、出版しようとする楽譜の音を確かめないまま、出版してしまったとは考えにくい。

おそらく、当時の人々の中でも「楽譜を自由に読みこなす」人は少なかったと思われるし、『ファウンダリー・コレクション』も、集会で讃美歌をリードする役割を果たす人に配られ、ウェスレーが指示を与えていたのだろう。その際、この歌集は、ウェスレーにしても聖歌隊のリーダーにしても、どんな旋律であったかを思い出したり、あやふやになった時にもう一度確かめたりする、いわば「ガイド」的役割を果たしていたと考えられるのである。

そう考えるならば、ト音記号の本来の意味である「ト音を示す」ために、当該箇所G（ト音）と書き加えるだけにとどめることや、拍子記号の代わりに「3」とだけ書いているのは、拍子をとるだけであれば十分である。変口の**b**外すために**b**をつけずに**#**ですましてしまう、記号を**#**（半音上げる）と**b**（半音下げる）の2種類しか使わなくてよいわけだから、むしろ合理的である。今回は楽譜で示していないが、1小節間全部の休みを音価（音の長さ）に関係なく、全音符1つで示してしまうのは、「全音符」の元来の意味である「小節全部を休む」という点で、十分理屈にあっていのである。

『ファウンダリー・コレクション』における問題について、さらにウェストブックは『ファウンダリー・コレクション』をそのタイトルから、「このタイトルの意味は謎だ」としている。その理由は、①メロディーだけで、伴奏が入っていない。②チューン集をつくるのであれば、本来歌詞はいらない、③チューンが「旋

律」を意味し、音楽Musicも「旋律」を意味しているから題名自体が「無意味な繰り返し」、④いくつかの歌は、音域やコントロール不能な声域である、ということからである。これらのことから、ウェストブックは、ウェスレーを「専門の編集者ではなかった」と評価している。

しかしこの点においても、ウェストブックの解釈は「ウェスレーが音楽の編集者として、完全ではなかった」という、それまでの一般的な見解を踏襲したものであると言える。

なぜなら、例えば③について言えば、「楽譜付き讃美歌集」というのは、現代では一般的だが、同じチューンに様々な「替え歌」で歌われるのが普通であった讃美歌に、いわば「固定した」チューンをつけるのであるから、それ自体が画期的であり、ウェスレーにとってTuneとMusicの意味するところは、あきらかに違うものであったと考えられるからである。

IV. 「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」 (マルコによる福音書 第2章22節)



〈写真2 ウェスレーの低周波治療器〉

ウェスレーは、新しいものを導入することに非常に積極的であったと考えられる。例えば〈写真2〉は、電気を発生させて血流を良くするための、彼のリラクゼーションマシンである。他にも、ウェスレー・チャペル（かつてのファウンダリー）に隣接するウェスレー・ハウスには、乗馬練習機や筆記具、料理道具

など、ウェスレー愛用の新しい知恵を生かした道具が展示されていることから、その傾向は窺い知れる。

また、ウェスレーが自分の日記を、暗号を用いた特殊な書き方で書いていたことは知られていることでもある。彼が「メソディスト」という新しい信徒グループの信仰告白である讃美歌集を、グループ独自の新しい様式で整えて書いてみようとした可能性もある。つまり、『ファウンダリー・コレクション』に用いる讃美歌を、記譜法から新しいものとするにより、メソディストというグループ（共同体）のありようを指し示しそうとしたと考えられるのである。同時に、当時のメソディストはその集会在がチケット制であった時もあり、ある種の「秘密結社」的性格も保有していたため、記譜法の特長性は、グループの特長性を象徴する意味も含んでいたのかもしれない。



〈譜例5 サリスバリー-Salisbury : 『ファウンダリー・コレクション』 p. 11〉

しかし一方で彼は、新しい試みを取り入れながら、古典的な歌唱法にならうなど、原点回帰する傾向も確認される。

〈譜例5〉に示すサリスバリー・チューンSalisbury Tuneで彼は、1つの音に1つの音節をいれるという、古いスタイルを引き継いだスタイルを保ちながら、Christ the Load is Risenという歌詞をあてがって、詩篇歌の新しいスタイルを示している。

これもまた、ただ単に彼が古い様式を引っ張り出したというよりも、歌の形を1つの音に1つの音節というシンプルな形にもどすことで、会衆たちにより一致して歌いやすい形を模索していたと考えられる。

このようなことから、ウェスレーは『ファウンダリー・コレクション』を、新しい信仰グループの信仰告白であり、なおかつ象徴するものとしようとしていた意図が楽譜からうかがえる。つまり、古くからある歌も新しい歌も、「新しい記譜法」を用いることで、「新しい信仰」を表明する意味を持たせ、讃美歌で歌われている内容だけでなくその実践をも含めて、新しい信仰グループの象徴としようとしていたと考えられるのである。その際、具体的に記譜法として採用されるものの判断基準からわかるのは、彼の合理性である。「G」と書いてあるだけの音部記号や、 \flat のない変音記号、上半分しかない拍子記号なども、楽譜に運用最低限の情報を載せ、特別な音楽的知識がなくとも、会衆にとっては実践の中で理論を学びながらやるためには十分使いやすいものであったと考えられる。実際、筆者がト音記号の説明や、 $\sharp \cdot \flat \cdot \natural$ などといった説明で困るのは、それぞれの記号の必要性が今一つ伝わらないという点である。ト音記号が「G」だけであれば、変音記号が \sharp （半音上げる）と \flat （半音下げる）だけであれば、どれほど楽であろうと思う。

メソヂストは、讃美歌においても説教や生活においても、日常的な生活方法によって、信仰生活の聖化、霊的な聖化を実行しようとする信仰を持っている。そのようなことから楽譜を1つのガイドとみなし、楽譜を丸暗記するのではなく、楽譜をガイドに皆でうたうことで歌を覚え、どのような人でもできるだけ楽譜を読めるようになるよう工夫をしていることがわかるのである。『ファウンダリー・コレクション』に現れる、ウェスレーの芸術観には、歌や音楽を「芸術」として祭り上げるのではなく、「活用し」「生かしていく」ものであるという彼の考えかたがにじみ出ている。そこで歌われるメソヂストの信仰もまた、「信仰」としてどこか遠くにおいておくのではない、自分自身の人生においてリアリティーを持つものであるということを、ウェスレーはメソヂストの信仰としていたのと考えられる。

今後は、さらに『ファウンダリー・コレクション』編集にかかわる時期の、ウェスレーの日記とともに、彼の支援者やメソヂストの主要メンバーの遺稿集、

同時代の音楽文化や楽譜など参照し、共同体における音楽活動の歴史の変遷について研究を進めていきたいと考えている。

〈参考文献表〉

- Edger, R. Frederick 1952. A Study of John Wesley from the Point of View of the Educational Methodology used by Hymn in Fostering the Wesleyan Revival in England. Ph. D. diss., Columbia University 1952
- ハーバーマス・ユルゲン『公共性の構造転換 - 市民社会の一カテゴリーについての研究 -』細谷貞雄, 山田正行訳 1994年5月, 未来社
- 稲垣久和, 金泰昌, 編 2006『宗教から考える公共性』ヨルダン社, 東京
- Kimbrough Jr., S. T., ed. 2007. Music and Mission: Toward a Theology and Practice of Global Song. Cokesbury Nashville, U.S.A.
- Lightwood, T. James
1935. The Music of The Methodist Hymn-Book. The Epworth Press, London, U.K.
1905. Hymn-Tunes and Their Story. Charles H. Kelly. London, U.K.
- 馬淵彰「チャールズ・ウェスレー - 福音と出遭った詩人」『福音主義神学』35号, 2004年12月, pp. 57-79, 東京
- 重富勝己「第1章ボランティアの沿革と理論」深尾幸市編著『ボランティア概論』所収【1-33】久美株式会社 2004
- ショウ・スコット「初期メソヂスト教会の礼拝音楽」『礼拝と音楽』2004年秋号 No. 123, pp. 8-13 (ショウ万里子訳), 日本基督教団出版局, 東京
- Wesley John,
The Works of John Wesley, 14 vols., (Michigan: Baker Book House, 1979) Rep. from the 1872 edition issued by Wesleyan Methodist Book Room, London, Vol. XIV, 'List of Poetical Works' pp. 319-45, 'Musical Works' pp. 345-46
- 1798 Collection of Hymns: for The Use of The People Called Methodists: a New Edition, Printed for G. Whitfield at the New Chapel, City-Road, London
- 1877 Collection of Hymns: for The Use of The People Called Methodists: with a New Supplement. Wesleyan Conference Office,

London

(出版年不明) A Collection of Tunes: Set to MUSIC,
as they are commonly Sung at the FOUNDERY,
Printed by A. Peason, London

Westbrook, B. Francis 1974. Some Early Methodist
Books, Wesley Historical Society Lecture, London

山本美紀『メソヂストの音楽 - 福音派讃美歌の源
流』ヨベル社, 2012年

Young, C. Carton 1995. Music of The Hart: John and
Charles Wesley on Music and Musicians. Hope
Publishing Company, U.S.A.

注

- 1 ウェスレーは1738年5月24日の夕べ、アルダスゲートでもたれたモラヴィア派の集会に参加し、「アルダスゲートの回心」のときを迎える。この時彼は、「不思議に心が燃える気がした」と言い、メソヂスト信仰の神髄でもある「ただキリストへの信頼」と「罪からの完全な自由の確信」を得、活発な伝道活動に励むようになる。
- 2 重富勝己「第1章ボランティアの沿革と理論」深尾幸市編著『ボランティア概論』所収【1-33】久美株式会社 2004
- 3 これは、ジョン・ウェスレーが讃美の力を初めて目の当たりにした体験によっている。ジョージア伝道にむけ1735年10月4日に出発したものの、途中何度もひどい嵐に遭遇した。しかしそのような嵐の中でも、同船していた26名のモラヴィア教徒たちは動揺することなく、一心に讃美を歌っていたのである。そして、彼らの心の平安が、その讃美に依っていることに気付いたのである。それからジョンは彼らの姿に深く感動し、彼らと話をするためにドイツ語の文法を習い、また彼らの讃美歌『フレイリッヒハウゼン 歌集Freylinghausen Gesangbuch』を学ぶようになったという(山本 2012, 28)。